

Raymond A. Bauer (ed.), Some Views on Soviet Psychology, American Psychological Association, Washington D. C., 1962. 285 p.

中村 恵 一

本書はアメリカの十三人の心理学者・社会心理学者の執筆したソビエト心理学の歴史と現状に関する論文をR・A・パウアー⁽¹⁾が編集したものである。一九六〇年五月より九月にかけて多数のアメリカの心理学者が別々にソ連を訪問し各地の研究施設などを見学したことが、本書の背景となっている。

数年前まで米ソ両国の心理学は、相互に殆ど独立に研究をつみ重ねてきた観があった。しかし近年両国の心理学研究が少なからず進歩し、とくにソ連における一部領域の研究の発展が目立つようになるにつれ、相互交流の欠除は、きわめて不自然なものになった。国際的状況の変化は長い間疎遠であった両国の科学者の広い交流を可能にする条件を作り出し、科学上の協力と議論を展開する契機を与えるに至ったものと考えられる。この問題およびソビエトの社会心理学の問題についてはすでに南教授が「心理学における東と西⁽²⁾」において述べておられるので、合わせ読んでいただければ幸いである。

一九六〇年のアメリカの心理学者によるソ連訪問の特徴は、様々な領域の心理学者に個人としてソ連の現状を視察させるこ

とにより、各人がその専門領域の立場からその関係する部門の研究を正確に把握できるようにしようとしたところにあった。しかし一人の滞在期間は四週間足らずであったもようであり、もとよりこの短かい期間にいかにも専門家であっても、⁽³⁾一國の心理学の現状を深く知りつくすことは不可能なことである。しかし一人の学者が全容をつかもうとする場合と異なり、各人がその専門的知識を十分に生かした点では成功した試みといえることができる。

本書の構成は次の通りである。

序文 R・A・パウアー。第一章 現代ソビエト心理学入門 A・ミンツ。第二章 思考と問題解決及びその関係領域についての若干のソビエトの研究 W・R・レイトマン。第三章 バロソナリティー発達と社会化についてのソビエトの研究 U・ブロンフェンブレナー。論評 O・クラインバーグ。第四章 ソビエトの精神衛生施設と心理学 H・P・デイヴィッドと T・S・デイヴィッド。第五章 こどもに関する研究と臨床 Y・ブラックビル。付録 幼児研究に関する機械の使用に関する実例と覚え書。第六章 ソビエト教育心理学と産業心理学についての観察 E・A・フレイシユマン。第七章 ソ連における心理学と精神生理学の諸相 N・E・ミラー、C・パッフマン、H・シュロスバーク。付録 ワルシャワへの訪問。第八章 ソビエトの生活とソビエト心理学 G・マーフィーとL・マーフィー。

筆者のうち数人は、草稿をあらかじめソビエトの関係する学

者に送り、ソビエトの学者からの返信によって草稿に手を加えている。筆者達は、各々の専門領域を分担して書いているが、やむを得ない内容の重複はかなりあり、これをソビエトの研究機関・研究者単位に分けて編集しなせばボリュームは小さくなったであろう。しかし重複する個所は、多くの学者が共通の関心を示したこと、さらに時には同一の問題について必ずしも同じ見方をしていないことをも知ることができる。また別々に訪問したことで一人の学者が聞きのがしたことを別の学者がおぎなっている利点もある。またソビエトの雑誌や単行本から知られる公式の見解の他に個人的な意見や若干の細かい研究事情もあらわれている。

本書によってアメリカの心理学者がソビエトの研究のどこにもっとも興味をひかれているかを知ることができ、またソビエトの研究の特色にふれることにより、アメリカの学者が自国の研究を客観的に見なおす契機をつかんでいることも知られる。またソビエトにおいて中心的な役割を果す理論があることに、個々の具体的な研究においては多様な理論や方法のあることも見出される。

次に各章の内容を重点的に紹介してみよう。第一章はロシア生れのミンツがソビエト心理学の有力な理論としてのバヴロフ⁽⁴⁾およびマカレンコの学説を説明し、最後にイデオロギー上の問題にふれる。ミンツの論文は以下各章の選択的部分的な報告に對してソビエト心理学への全般的な展望を与える意味をもっている。

彼によれば、現代ソビエト心理学はタチーシチェフ、ロモノーソフ、ドブロリニューボフ、セーチェノフなど長い歴史上の先駆者の業績を背景としており、ロシアで最初の心理実験室をたてたのは、ベヒテレフ(一八八六年)とコルサコフ(一八八八年)である。しかし現代ソビエト心理学において中心的役割を果しているバヴロフ学説が心理学に導入されるようになったのは比較的新しいことがらであり、この学説の導入が政治的背景をもって行なわれたために一時はバヴロフの引用が無関係なところにはまではならなかった。ミンツはバヴロフの考えのあるものは、無視されているように思われるという。

第二章は思考に関する実験的研究と教育学的研究及びサイバネティックスの研究の検討が行なわれている。思考に関する研究は現在ソビエト心理学でもっとも関心を持たれているテーマの一つである。しかしソビエトにおける思考研究はバヴロフ理論に基き、西欧が用いている概念構成と著しく異なるので、レイトマン(Walter R. Reitman)は相互交流に困難を痛感しているようである。しかし一部のサイバネティックスの研究においては事情は異なる。

しかし彼は異質の研究にも強い関心を示し、ガルペリンの研究とアメリカのハーロウ、スキナーらの研究とを比較し、さらに自分達のこの方面の研究をふりかえって反省している。

ソ連の学者によって思索されている理論は多くの点で実験的証拠によって支持されないかも知れないが、アメリカの心理学者はどういう証拠を集めるべきかを決定するに必要な体系的な

思索にすまらなかつた欠けていることがあるというのである。
ソビエトとアメリカの研究においてときに見出される双方の
弱点をついて興味深い。

モスクワ心理学研究所の思考と言語研究室の室長であるシエ
ミャーキン⁽⁶⁾は現代科学革命が心理学に著しい影響を与え、古典
的な連合主義はもはや支持できないものとなり、統計的、非決
定論的見地に屈服したと述べたという。シエミャーキンはこの
新しい見地の發達をゲシタルト心理学(とくにウエルトハイマ
ー)と共にクラバレードやシュテルンにさかのぼって説明した
が、彼自身の研究努力をこの新しい立場にはっきりとは関連づ
けて云わなかつたという。レイトマンの紹介が正しければ、ソ
ビエト心理学の中の見解の多様性の一端を明らかにするもので
あろう。

一九六二年に日本を訪れたクルチエツキーの数学的才能研究
についてレイトマンは神経系の類型に関するバヴロフの概念の
使用を除けば、彼の分析的枠組はアメリカの心理学者の使うも
のとあまり異なっていないと考えている。クルチエツキーは後
に偉大な数学的才能を示す人物は、そうでない人々とは生れつ
き異なつた脳の生理と機能をもっているだろうと⁽⁷⁾考え、ボイコ
の生理心理的方法を用いて生理学的差異を証明しようとして
いる。しかし数学的才能のあることも達のために特殊学校を作
る試みは、ソビエトがエリート⁽⁸⁾を發達させることをおそれたの
で実現しなかつたという。

第三章はソ連におけるパーソナリティー形成の研究をとりあ

げており、ブロンフェンブレナー⁽⁹⁾は米ソのこの領域の研究を比
較すると、その文脈、方法、領域の面では著しい差異があるに
もかわらず、パーソナリティーが形成される基礎過程の概念
は大変類似しているという。(性格の形成は小さい子どもの時
代に始まり、家族の生活様式、家族関係、しつけの性質などを
通じてなされる。)

クラインバーグはブロンフェンブレナーほど米ソの差異を著
しく感じてはいない。
ブロンフェンブレナーはソ連の心理学者間の意見の相違につ
いて述べ、パーソナリティー研究のための実験的方法の妥当性
に疑いをもっているレニングラード大学の人達に対し反対に兒
童心理学の進歩にとって最も望ましい源泉として実験室に頼る
モスクワ大学の心理学者もある、しかし両者の差異は米ソの違
いほどではないと考えている。しかしこの問題について、クラ
インバーグ(Otto Klineberg)は都市間の差ばかりでなく同じ
都市の中でも研究の規模や性質について意見が決して一致しな
いと述べている。この点は私も同感であり、ときには都市間の
相違よりも個人個人の意見の相違、研究態度の差異が目立つよ
うである。

第四章は、ソ連の精神衛生施設とその方面の研究とがアメリ
カと比較検討されている。ソ連のこの面の設備はすぐれており、
アメリカほどに処理すべき難問が多くないかに見受けられる。
しかしアメリカのアルコール中毒対策には大きな関心が示さ
れ、「少年犯罪は、増大しつつある産業化とよりよき時代の副

産物、ソビエトの生活の事実として、今ではししぶ認められているようにみえる。」(デイヴィッド)

第五章は近年子どもの確率学習などの研究を行なっているブラックビル (Yvonne Brackbill) が子どもに関する研究と臨床的仕事とをかなりくわしく紹介している。

この章と第七章で扱われている種類の研究が、日本でもっともよく知られてきた分野であろう。カサトキンやコリツォーヴァらの乳幼児を対象とした条件反射的研究、キエフ心理学研究所の業績、欠陥児学研究所の臨床的な研究などが主な内容になっている。

ミルゾアンツやカサトキンの実験は生後十日ないし十五日の子どもに長期間吸啜反応や空気吹つけによるまばたき反射を条件づけ、刺激の弁別が行なわれる時期を調べている。

これらの条件結合の発達する年齢が用いられたCSの種類(視覚か触覚か等)の関数であり、用いられたUCS—Rの種類の関数ではないとするところにソビエト生理学者の特徴があるとブラックビルはみなしている。即ち、アメリカでは反応を強調するのに対し、ソビエトでは条件刺激を強調する。

第六章は産業心理学と教育心理学をとりあげている。労働心理学の視界はアメリカよりもせまく主として訓練、「工学的心理学」、作業の方法と条件の研究からなるが、これらの研究は工場、学校、実験室と広い方面からなされている。これらの種類の研究にフレイシユマンも大いに関心を示している。

生徒に仕事を学習させる際、ことばで説明して仕事をさせる

と、作業は質の高いものとなるが時間はよけいにかかる。反対にデモンストレーションによると、早く実行できるようになるが、作業の質は低くなる。両方の方法を用いれば、どちらか一方の方法を単独で用いた場合よりも作業は質もよくなり一層速くなった。観察の結果、デモンストレーションによった被験者の作業方法はことばで聞いた被験者の作業方法と異なり、前者は先生のまねをするが、言語的説明を受けると自分の方法にたちもどる。

もっともこれらの結果はおそらく作業内容の難易の程度によってもかなり影響を受けるのではないかと考えられる。

一方学習の動機づけに関しては教育心理学者が研究しており、ボゴヤブレンスキーの研究によると「知ろうとする願望」を刺激するためにはあまり言語的説明は効果的ではなく、重要なことは、子どもの自己活動であるという。

工学的心理学の研究者の中にはアメリカのこの分野の発達に大きな影響を受けているものもある。またいわゆる産業心理学の研究分野は将来ここで指摘された以上に拡大する可能性もある。

第七章はアメリカのこの分野における代表的な三人の学者(ミラー⁽¹²⁾、バツフマン⁽¹³⁾、シュロスバーク⁽¹⁴⁾)が報告している部分で、高次神経活動研究を主体とし、チェアプロフ、ソコロフ、ヴォロニン、レオンチェフ、ツァイガルニク、アノヒン、アストラチャン、ミヤシシチエフなどの他、スファミのモンキー・コロニーやトビリシでの研究がとりあげられている。

グルジアの構えの研究はヴズナツヅエの創始したもので、バーソナリテイの実験的研究の一種である。イギリスのアイゼンクの研究が主としてG・S・Rの条件づけによるのに対して視覚や重量知覚における錯覚を指標としている点が異なり、ヒポクラテスの類型学と結びつけて性格を四つの種類に分類する。チェブロフの類型学と彼等のものと同じかどうかの間に對しては、チェブロフの類型学はバヴロフに從つた神経学的なもので、自分達のものは心理学的であると彼等は答えたという。

なお「ワルシャワへの訪問」にはコノルスキーらの研究及びロズの生理学研究室の人々との討論の結果が報告されている。ここにはソ連と違つて西欧との語学的なへだたりが殆んどないようである。コノルスキーとシュロスバークとは動機づけという概念が条件反応の二つの型に關しては不必要であるという点で殆ど意見が一致したという。

一九六〇年当時のポーランドの実験装置はかなり貧しかったもようであるが、頭と獨創性と熱意とによつて単純な装置を使いながらもすぐれた業績を上げていることをアメリカの学者達も認めている。

第八章はマーフイー夫妻がソ連における体験を日記風に記しているもので、ソ連の心理学と生活について全般的にふれている。彼等はとくにソ連のとした世代とこどもとを對照させ、こども達が最善のものを与えられていると考へる。

本書に對するソビエト側の評価としては、ルリヤの批評がある。そこでルリヤの指摘している主な点を要約すると次のよう

になる。

一、アメリカの心理学者達がソビエトの心理学を客観的、好意的に報告し、高く評価していること。

二、筆者達がソビエト科学の急速な発達、政府の科学発達への深い配慮、ソビエトの学者のもつ高い威信とを指摘していること。

三、ソビエトでは生理心理学、教育過程の心理学的分析、思考過程の研究が進歩しており、この面でアメリカはソビエトから大いに学びうることを、一方あまり発達していない領域もあるが、すでに一九六〇年の時点で社会心理学や工学的心理学の問題が著しく復活していることを筆者達が認めていること。

四、筆者達は両国の心理学者の間にはイデオロギー的な相違があるにもかかわらず、相互間の實際的科学的交流が必要であり、交流は双方の側を利することになると指摘していること。

五、本書の報告は、アメリカの重要な權威ある心理学者達によつてなされたものであり、本書による展望は短期間の視察から生ずる個々の不正確さを除けば、ソビエトの心理学者による仕事を正しく反映しており、ソビエトの科学の状態について有益な情報を提供していると認められること。

以上の内容からルリヤが自国の学問水準に自信を持ち、本書の成果についてほぼ満足していることがわかる。

本書を全体としてみると、米ソ両国の研究に、概念や重点のおかれていた面などさまざまな差異があるにもかかわらず、一面じかに通じ合う点もあり、そのような異質な点と共通な点

との双方において科学的交流の価値が明らかになっていいると考
えられる。

本書は一九六〇年という時点におけるソビエト心理学の展望
であるが、ここでブロンフェンブレナーとクラインバーグがソ
ビエト社会心理学の発展について与えた予言は、現在現実的な
ものとなりつつある。新しい人間の形成という歴史的な課題、
生産の複雑なオートメーション化と生産管理システムの改善、
犯罪など社会病理的な問題の解決、プロバガンダの改善、この
ような一連の社会的要求を背景として、これまで比較的進んで
いなかった領域の研究が急速に発達しつつある段階と云えよ
う。

いうまでもなくこのような課題はこの国にのみ特有のもので
はない。これらの問題に答えるためには、直接応用的研究が盛
んになると共に、各方面で、より基礎的な研究が積み重ねられ
ていく必要がある。

(1) Raymond Augustine Bauer (1916—) はシカゴに
生れた心理学者で、M・I・Tで社会心理学を教え、ロシ
ヤニケーション、政治行動の研究の他、ソビエト心理学の
研究者でもある。

(2) 『思想』一九六四年四月号三九頁—五〇頁。および松
本金寿「ソビエト社会心理学の現状と性格」、同号五一頁
—五九頁。

(3) ただし筆者のうち一部の心理学者はこの旅行以前にソ
ビエトを訪問した経験がある。

(4) Alexander Mintz (1902—) はキエフに生まれ、ペ
ルリンで学んだ心理学者。現在ニューヨーク市大で主とし
て心理学の歴史および社会心理を研究している。

(5) イデオロギーの問題は、南博「心理学における東と西」
参照。

(6) シェミヤキンによればこの革命の基本的な要素は、
(a)非ユークリッド幾何学の発達、(b)集合論のパラドック
ス、(c)相対性理論、(d)量子物理学の統計力学、(e)情報理論
とサイバネティックスの五つである。

(7) ただし才能そのものはただちに遺伝的なものものでは
なく、才能は活動を通じてのみ発達する。

(8) Die Bronfenbrenner (1917—) はモスクワに生
れ、コーネル大、ハーバード大、ミシガン大に学んだ心理
学者。パーソナリティー理論、こどもの発達などを研究し
ている。現在コーネル大学教授。

(9) Ильяский Дрежм ЦК КПСС и задачи психологии.
Вопросы Психологии, 1963: 4, 3—6. には「一般心理学も
社会心理学もソ連において犯罪のあることの社会心理学的
原因の研究や犯罪とくにこどもの犯罪のほくめつに一層効
果的な手段と方法の研究をすることにより、複雑な課題の
一つを解決しなければならない」という一節がある。

(10) Henry P. David (1923—) はドイツに生まれ、コ
ロンビア大学に学んだ心理学者。投影法を研究し、精神衛
生問題などを扱っている。

- (11) Edwin Alan Fleishman (1927—) はテキサス州に生れ、メリーランドに学んだ心理学者。ラックランド空軍基地 (サンアントニオ) で応用心理学の仕事に従事し、現在はエール大学で産業心理学の研究をしている。
- (12) Neal Elgar Miller (1909—) はミルウォーキーに生まれ、スタンフォード大、エール大に学んだ実験心理学者。『社会的学習と模倣』(共著)などの著書がある。
- (13) Carl Pfaffmann (1913—) はフルツクリンに生まれ、ブラウン大、オックスフォード大、ケンブリッジ大に学んだ生理心理学者。ブラウン大学教授。
- (14) Harold Schlosberg (1903—) はプリンストンに学んだ心理学者。現在ブラウン大学教授。動物と人間の学習・情動などを研究し、なかでも表情の研究は日本でも比較研究されるなど名高い。
- (15) A. P. Дурин. О сборнике статей американских психологов «Некоторые впечатления о советской психологии». Вопросы Психологии, 1963: 3, 147—148.

(一橋大学大学院学生)